



Title	日本語・日本文化 第41号 奥付
Author(s)	
Citation	日本語・日本文化. 2014, 41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50761
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

執筆者紹介

中田 一志	本センター教授
小森 万里	本センター特任助教
松本 明子	本センター非常勤講師
岩井 茂樹	本センター准教授
中山 延之	本センター非常勤講師

編集後記

『日本語・日本文化』第41号をお届けする。今号に掲載されている五本の研究論文のうち、三本が日本語学・国語学関係のもの、一本が日本文化、そして一本が日本語教育に関わるものである。数としては少し言語関係のものが多く集まった格好になるが、言語・文化・教育のいずれの領域をも継続的に掲載できていることは、「日本語」「日本文化」そして「教育」をその名に冠する本センターの紀要として、健全なことというべきである。

中田論文は漫才の笑い、特にボケ・ツッコミと呼ばれる要素を会話の原則や認知理論から分析したもの。小森論文は学術論文に現れる「(の)ではないか」の出現位置を分析し、日本語教育の作文分野への応用をはかろうとするものである。松本論文は不定語「いづれ」を取り上げ、その歴史的変遷を丁寧にたどった論稿である。松本氏はこの他にも不定語についての論稿が多くあり、本論もそれらの系列の一つに位置づけられる。縦書きの岩井論文は「痴漢」という語について、言語的・文化的観点から通史的に考察したもので、特に江戸時代の用例を詳しく論ずる。中山論文は桃源瑞仙の抄物『百衲襖』に見られるノとがとが尊卑によって使い分けられていることを示し、さらに朱子に対する用い方が、呼称によってさらに複雑に入り組んでいることを明らかにしたものである。

本センターでは昨年度三名の教授が退職され、今年度新たに四名の教員を迎えることに

なった。日本語・日本文化の教育と研究をより一層充実し発展させていくことが我々の責務であるが、それは新しい力との協働があつてこそ、よりよい形で果たすことができると考えている。

『日本語・日本文化』投稿規定

1. 資格：本センターまたは関係機関所属教員（非常勤を含む）及び『日本語・日本文化』編集委員会において適当と認められた者。
2. 内容：日本語・日本文化等に関する未発表の研究論文・研究ノート・研究報告等。
3. 体裁：研究論文は400字詰原稿用紙50枚前後（欧文はA4ダブルスペース30枚前後）、研究ノート・研究報告は25枚前後（欧文は15枚前後）。
4. 要旨：本文和文の場合、欧文による要旨（A4ダブルスペース1枚）を、欧文の場合は、和文による要旨（800字程度）を添付。
5. 採否：原稿の採否は『日本語・日本文化』編集委員会が決定する。

編集委員

加藤 均 佐野 方郁 蔦 清行

日本語・日本文化 第41号

2014年3月31日 発行

編集 大阪大学
発行 日本語日本文化教育センター
〒562-8558
箕面市粟生間谷東8-1-1
電話 (072)730-5459
FAX (072)730-5074
印刷 中西印刷株式会社